マルコ 10 章 13－16 節
「祝福」

今日は「子ども祝福式」です。「子供たちをわたしのところに来させなさい。」このイエスさまが語られた御言葉は、現代の私たちが聞くよりもはるかに革命的で驚くべき響きがあったということを、詳しく見ていきましょう。

13節「イエスに触れていただくために、人々が子供達を連れて来た」とあります。きっと主イエスに触れていただくことで、子供たちが健やかに成長し、祝福された歩みを送ることが出来ると、連れてきた両親は考えたのです。しかし、子どもを連れて来た人々を弟子たちは叱りました。「未熟」な子どものために、イエスさまの時間を取らせてはいけない、と弟子たちは考えたからです。しかし、イエスさまはこのような弟子たちに対して憤ります。「憤る」とは、抑えられない怒りの感情の噴出のように聞こえます。この憤りにこそ、イエスさまの弟子たちを思う気持ちや、弟子たちを支配している罪を憎む思いの激しさが現されているのです。イエスさまは、弟子たちが子どもを妨げたことに憤っているのです。

そこでイエスさまは「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない（15節）」と言われました。誰しも、「子供のように受け入れる者」でなければならない。「子供のようになれ」と。この「子供のように」とは、素直さや純粋さのことも含みます。しかしそれ以上に、イエスさまが私たちに伝えたかったのは、子どもがいかに無力であるかということでした。子どもは、生きていくことにおいて無力で、出来ないことが多い者です。親や周囲の人々の世話にならなくては生きていけません。生活するにも誰かを頼らなければならず、信仰生活においても何も持っていない姿が、ここには映し出されているのです。イエスさまは、自分で自分を救うということにおいて全く無力で取るに足らぬ小さな子どもを、ただ、その無力さ故に、救い主イエスは喜んで子どもたちを抱き上げ、祝福してくださるのです。

16 節「子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」とあります。そもそも、「祝福」とは何でしょうか。旧約聖書において祝福とは、物質的な、目に見えるものが祝福の中心でした。例えば、子孫繁栄や平安が与えられることが、「祝福」です。そして新約聖書の時代になると、イエス・キリストを受け入れた人々へ受け継がれ、イエス・キリストを信じることによって注がれる、与えられるものが「祝福」とされてきました。そしてその「祝福」を与えるために、イエスさまは子どもたちを抱き上げ、手を置いてくださいました。頭は、特に大事な部分です。その大事な部分を、あえて触りながらお祈りする。それは、すべて神さまにお任せします、という意味が込められているのです。無力な私たちだからこそ、何もできない私たちだからこそ、頭に手を置いていただき、全てをあなたに委ねます、ということが祝福の儀式なのです。

私たちは、幼い時には持っていなかった色々なものを、成長するに従って身にまとってしまっています。でも、身に着けた諸々の一切を脱ぎ捨て、幼子のように神さまに支えられて生きることにこそ喜びを見いだすことができるようになる時、私たちは祝福で満たされるのです。そして、幼子のように、それよりももっと小さな赤ん坊のように、えんえんと泣く声と一緒に、神さまイエスさまをしつこく呼ぶ者になりたいと願います。神の子どもたちである皆さんに、神さまの豊かな祝福がありますようにと祈ります。